

ハンス・メモリンク《聖ウルスラの聖遺物箱》

— ナラティブによる聖性と救済思想の顕示 —

やまがた み ゆ き

山形 美有紀 (京都大学)

発表
要
旨10
時
|
10
時
40
分松
ヶ
崎
・
東
キ
ャ
ン
パ
ス
内
60
周
年
記
念
館
1F
記
念
ホ
ール

ブルッヘの画家メモリンクは、多彩な宗教実践の繚乱を背景に、各実践に供する革新的な絵画表現を次々と構想した。霊的巡礼の媒体、《受難伝》(サバウダ美術館)の斬新な物語構造をめぐるは今なお議論が絶えない。他方《聖ウルスラの聖遺物箱》(1489年以前、メモリンク美術館)の物語表現は、凡庸な構図が一因となり、看過されがちであった。そこで本発表では次の観点から、納入物の聖性を伝えるべく、木製聖遺物箱という特殊形態に導入された独創的な物語戦略を詳らかにする。

第一に、従来の聖遺物箱上の物語表現は納入物の縁起・霊験・現前を誇張するのに対し、本作の物語表現は巡礼の場面だけを扱う点で特異性を有する。メモリンクは、巡礼への憧憬に訴えるという新機軸を使い、信者の宗教心を喚起した。本作は厳密に言えば霊的巡礼の補助装置と異なるが、それに類する機能を果たした。本作の奉納先である聖ヨハネ施療院の聖職者・患者は、箱の周囲を歩き回る身体運動を伴い、聖ウルスラと一緒にケルン・バーゼル・ローマという巡礼地をめぐる擬似体験を通して、まるで贖宥を集めるかのような感覚を抱いたことだろう。現存する「聖遺物奉遷記」によれば、本作内部には、聖地から持ち帰られた土の聖遺物が数多く入っていた。1478年にはブルッヘが「擬似ローマ」に指定され、巡礼者に全贖宥が授与された。上記2つの事実は、本作の受容基盤として、同時代人が巡礼に並々ならぬ関心を寄せたことを傍証する。

第二に、本作の物語場面には船のモチーフが幾度も拡大描写されるにも関わらず、その象徴性は等閑視されてきた。本発表では、これらの船が「教会」「救済」という二重の意味内容を持つことを、独自の見解として示す。ロベール＝カルーエ等によると、本作の全体形状は、聖母教会の「天国の門」をモデルとする。発表者は、船が図像伝統において教会の象徴とされることに鑑み、本作に描かれた船は、教会を模した全体形状と相まって、1459年の施療院の宗教組織化を喧伝したと考える。同時に本作の船は、死後の救済の過程を患者に説明する役割を担った。その傍証として、「ウルスラの小船 Ursula-Schifflein」の異名を持つ聖ウルスラ信心会が、信者たちを天国へ運ぶ船のイメージを普及した事例を提示する。

第三に、細密描写に着目する。写実的な都市景観をはじめとする本作の精緻な描写は、信者を近接視点へと誘い、聖遺物のウィルトゥスを間近に浴びさせる仕掛けとなった。さらには、僅かなモチーフに付随的メッセージを込めた創意工夫の一例として、画中の教皇が握る微細な「天国の鍵」が彼らの殉教と救済を想起させる点を、新たに指摘する。

メモリンクは絵画術を武器に、木製聖遺物箱を揶揄する『黄金伝説』『聖ウルスラ伝』の一節に対し、いわば挑戦状を叩きつけた。奇しくもその真意を汲んだファン・マンデルは、1604年の『画家の書』で、本作に「純銀の聖遺物箱」に匹敵する価値を認めたのだった。